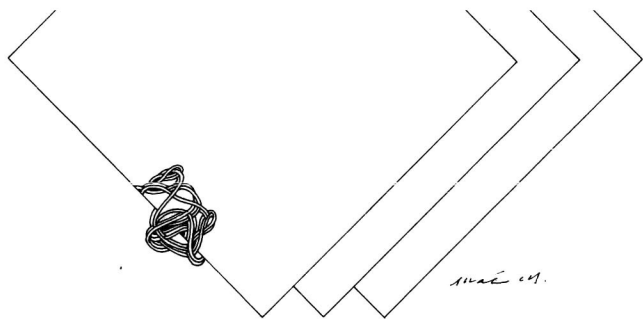


青樹社

唇と歯

吉行淳之介

日本財団支援





著者無検印承認

唇と齒

著作者〓吉行淳之介

発行者〓土井 勇

発行所〓株式会社 青樹社

東京都千代田区三崎町二一六―七 郵便番号一〇一

電話東京二六四―六九〇二・二六四―六九〇四 振替東京四七六四八

印刷所〓有限公司 八光印刷

製本所〓土開製本株式会社

落丁・乱丁本はお取り替え致します

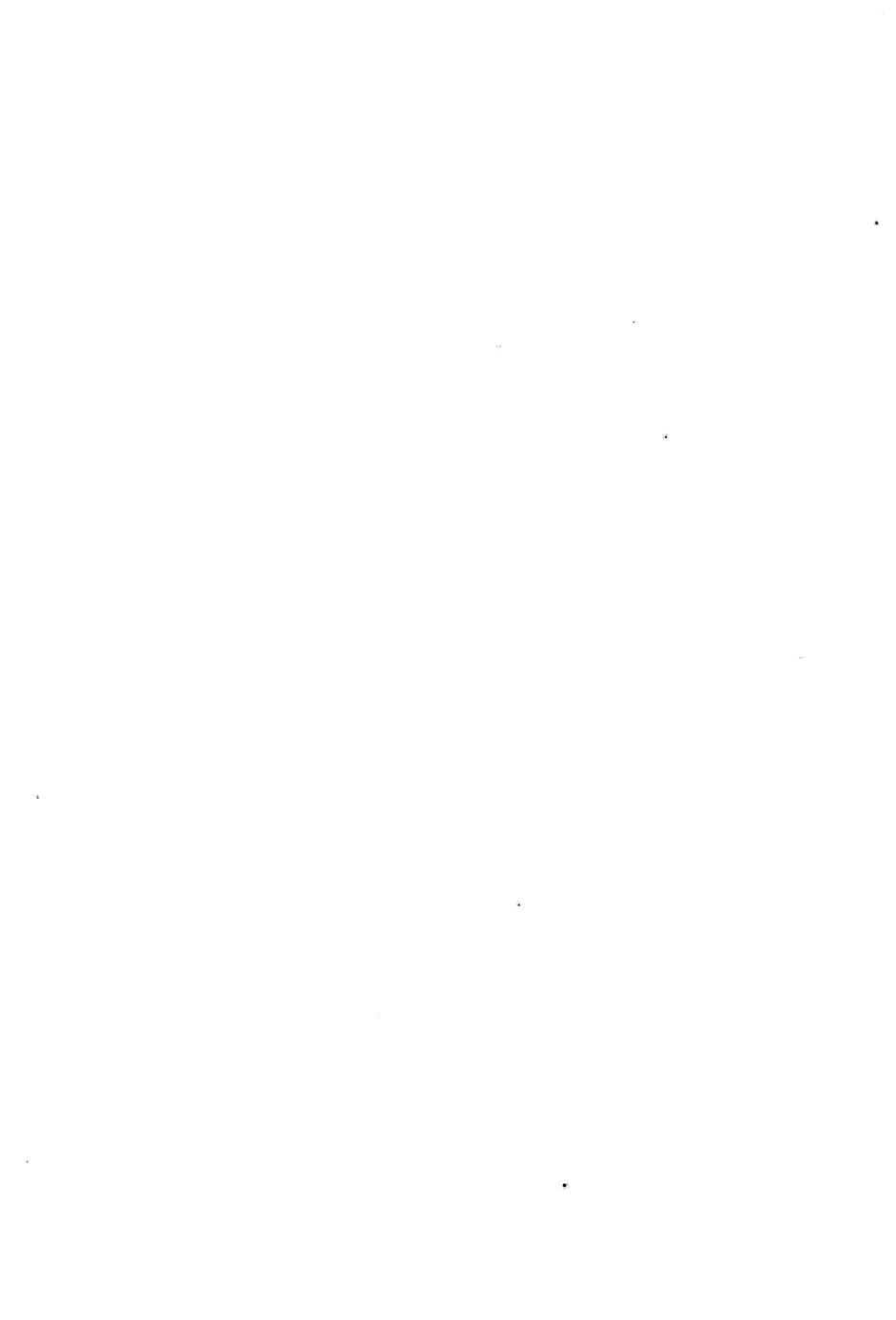
◆定価・発行日はカバーに表示してあります

唇
と
歯

目次

第一章	コルク銃	五
第二章	葱のにおい	七
第三章	秘密の本	三
第四章	沢山の荷物	三
第五章	白堊中	四
第六章	黒い影	五
第七章	仮面	三
第八章	急な階段	三
第九章	夜の構図	五
第十章	誘われる夜	五
第十一章	意外な出来事	六
第十二章	陰気な男	二
第十三章	怪しい会話	三
第十四章	猫背の背中	四

第十五章	ある手帖	一四
第十六章	分れ分れ	一五
第十七章	たくらみ	一六
第十八章	狐と狸	一八
第十九章	月岡と青木	一八
第二十章	一滴の毒	一四
第二十一章	上と下	二〇
第二十二章	剝れる	二五
第二十三章	珠と紐	二六
第二十四章	空気人間	二五
第二十五章	隠す	二六
第二十六章	腕の痣	二七
第二十七章	押問答	二八
第二十八章	三姉妹	二九



第一章 コルク錠

日暮れの街を、瘦せた背の高い男が、歩いてゆく。目的のない、ゆっくりした足取りだが、どこか屈託の感じられる歩き方でもある。道の両側には、商店が軒を並べていて、音楽を街路まで流し出している店の前をしばしば通り過ぎることになる。そして、その音楽は、揃いもそろってクリスマス曲である。

クリスマスに近い。というより、商店の稼ぎどきであるクリスマス・イヴに近い。

クリスマスの音楽を街路まではみ出させている店の前を通りかかるとき、その男の足取りは、まるで水溜りに踏み込んだように渋くなる。

幾度もそのことが繰返され、やがて追い立てられるようにその男の歩みが速くなり、ようやく音楽の聞えないところに達すると、立止まってオー

バーのポケットから煙草の箱を掴み出した。街路樹の幹に身を寄せかけるようにして、ライターを握った。

カチ、カチ、カチ。

堅い音をライターは続けて発したが、焰が燃えてこない。風があるわけではなく、オイルが切れているのだ。男はライターを掴みこんだ拳をオーバーの中に突込み、苛立たしげに、周囲を見まわした。オイルを補給するために、タバコ屋の店を探しているのである。

男の名は、月岡修一郎という。といえば、その名を記憶している人も、少しはあるかもしれない。若い小説家で、有名というわけではないが半年ほど前に新人賞を貰ったので、その報道記事のことを覚えている人もあるかもしれない、ということなのである。

月岡は、二年前に離婚して、独身になっている。貧乏生活に辛抱できなくなった妻君が逃げ出したのである。もともと、彼は拗ね者といえる人物であって、それが作風にも反映していたが、離

婚後は一層烈しくなった。もともと、そういう気風が一種の面白味を作品の上に醸し出して、受賞に役立ったということもできた。

そういう月岡が、クリスマス・イヴのような華やかさを好む筈がない。しかし、あの永井荷風のように徹底した反俗の姿勢を取った人物でも、その老年の独り暮らしの部屋に、隣家から豆を煮るにおいが流れこんできたとき、手荒く窓ガラスを閉め切った、という。荷風山人自身がそう書いていて、嘗て自分も覚え知っている一家団欒のにおいが耐え難い嫉妬をそそった、という分析まで付け加えてある。

街路樹の傍の月岡修一郎の苛立ちも、そうしてみるとなかなか複雑なものがあつたと考えてよいだろう。もともと、彼は団欒の気配を懐しむよりは、一人暮らしを愉しむ年齢といえた。三十歳なのである。

周囲を見まわした彼の眼に、タバコ屋の店が映つたので、歩み寄って行つた。タバコ屋というよりは喫煙具店で、その店先の一角がタバコ売場に

なっており、若い娘が一人売り子として坐つてた。

「ライター・オイルをください」

「いま、ここでお入れになりますか」

「そう」

「それならば、アンプル入りのオイルがよろしいでしょう」

「それがいい」

と、彼はライターを摘み出し、片手につまんだ硬貨をネジまわし替りにして、底のオイルの栓を脱した。そして、ライターと硬貨を娘の前に置いた。

「罐入りもありますけど、使い残りを持って歩くのは、面倒でしょう」

娘は彼の氣質を見抜いたように、そう言う。氣のきいた娘だ、と彼はおもしろい、その顔をあらためて眺めた。

頭の鉢のひらいていくせに、顎が三角にとがった小柄な女である。美人ではないが、可憐なところがある。光った眼で、すくい上げるように彼

の顔に視線を当てているが、そういう角度にもか
かわらず陰気ではなく、無邪気にみえる。機敏な
光も感じられた。

といって、行き擦りの女を誘う趣味は、彼は持
っていなかった。アンブルのオイルを入れ、釣銭
を貰って立去る筈のものであった。ところが、ささ
やかな出来事が起ったのである。

透明なガラスのアンブルに、オイルは入ってい
る。ハート型をした小さなやすりを、細くくびれ
たアンブルの頸に当てがって、ガラスを切ろうと
した彼の手許が狂った。やすりが飛んで、娘の腿
の上に落ちた。

「あたしが切ってあげますわ」

娘の顔に、好意の微笑が浮んでいる。彼のいか
にも不器用な手つきを、思い出している表情であ
った。

きれいな細い指をしている。その指に挟まれた
やすりが、ガラスの頸と触れ合って、きしきし音
を立てた。彼は凝っとその指とガラスを見詰めて
いる。娘はふっと眼を上げて、彼の熱心な眼に行

当たると、戸惑った顔になった。

その瞬間に、アンブルの頸が切れ、注意が散慢
になっていた娘の親指の腹がその切り口に突き当
った。皮が切れ、赤い血がゆっくりと盛り上って
きた。深い傷ではない。娘は親指の腹を上に向け
て、戸惑いがそのまま続いているように、黙って
血を眺めている。

血がまるい珠になったとき、彼はポケットから
塵紙を出して、そのうちの一枚で娘の指を包ん
だ。血が紙に滲み、表まで抜け、小さい赤い模様
を描いた。花瓣に似ていた。

不意に、勢よく彼女は指を引込めて、背中の中
しろに隠した。血の付いた紙が、月岡の手に残っ
た。彼女は黙って俯いている。肩が大きく上下し
ている。

くっ、くっ、と嗚咽おとに似た声が洩れ、なぜ泣く
のか、と彼がおもったとき、笑い声がひびいた。
笑いをこらえていた状態が、嗚咽に似たのであ
る。

「なにが可笑しい」

「だって……」

と、彼女は一しきり笑い、

「あんまりロマンチックなんだから」

「なるほど……」

「くすぐったいくらい、ロマンチックでしょう。

こんな具合にして、男と女の恋物語がはじまる小説があるじゃないの。もっとも、そんなのは、あまり出来のいい小説じゃないけれど」

「きみは、文学少女か」

月岡修一郎という名を知っていて、彼を揶揄しているのか、とおもった。しかし、彼を見知っている気配はなかった。そうだとすると、これはなかなか気のきいた娘じゃないか、面白そうだ、と彼はおもった。

「困ったな……」

と、彼は言った。

「どうしたの」

「こういうキッカケは、あまり出来すぎていて、物語がはじまらない。つまり、きみとのデートはできないということになるわけだから。この

キッカケを少し修正する必要がある」

彼は自分の手に残った紙を眺めた。滲んだ血はまだ赤い色で、紙は濡れていた。

「そうだ、もっとものすごくロマンチックになつてしまえばいい。くすぐったくなくなるくらいに、ロマンチックならいいだろう」

「どうすれば……」

「きみの血の付いた紙を、ぼくがムシャムシャと喰べてしまふ。お腹のなかに入れてしまふ」

娘は笑いを納め、一瞬生真面目な表情が覗いた。この女にはいま恋人はいないな、と判断した。彼は紙をまるめ、大きく開いた口に近づけた。

「そんなことしないで。なんだか恥ずかしいわ」

娘は手をのばして、彼の指から紙を奪い取り、もう一度背中の中うしろに隠した。そして、くすくす笑いながら、

「へんなこと考えるのね、へんな人……」

と言う。好意的な語調であった。

「今夜、デートしようか」

彼はむしろ投げやりに言う。誘う気持はない、ただ、ちょっと思い付いたことがある、そのことのためにこの娘を使ってもいい、と彼はおもう。そういう投げやりな態度が、かえって効果を發揮した。

「八時になれば、お店が閉まるのだけど」

まだ二時間あまり時間のあることを心配している気配が、その言葉の裏にただよう。

「八時か……待ちましょう」

彼は待合わせの場所に、パチンコ屋を指定した。有名な、大きな店である。

「その店の百番から百五十番までの機械のどれかで、玉を弾いているから」

と、彼は言い残し、タバコ屋の店先を離れた。

八時十五分過ぎに、機械に^{むか}対い合つて余念なく玉を弾いているようにみえる月岡修一郎の横腹を、小柄な女が突ついた。タバコ売場の娘である。見上げる顔が、彼の胸のあたりにあつた。

「慣れているのね」

と、娘が言う。

「玉の弾き方のことか」

「待ち合わせのことよ。ここなら、待たされても気にかからないものね」

「ぼくの言うことを、先に言ってしまったては、困るな。しかし、慣れているというが、デートの常習犯というわけではないさ。男の友だちとは、よくここで待ち合わせるけれどね」

「あら、弁解なの」

「違うよ。だいたい、きみを誘惑するつもりもないし、恋人同士になるつもりもないのだからね」
「そんなつもりになられては、困るわ……。でも、どういうつもり？」

「一緒に、酒を飲みに行こう」

「お酒は、ほとんど飲めないのよ」

「それなら、きみはジュースを飲めばいい。ところで、何という名前？ ぼくは月岡というんだ」

「まさ子。正直の正です。道田正子というのよ」

「正直の正、とは正直な言い方だな」

「いくらヒネってみても、結局そこに落着いてし

まうもの」

頭の回転はわるくない女だぞ、と彼はおもひ、受皿のパチンコ玉を浚い出すと、正子のくっつけ合わせた二つの掌に山盛りに載せ、
「景品に替えてくれ。チョコレートがいい、きみにあげる」

と言った。

パチンコ屋を出てから、月岡は銀座並木通のスタンド・バーの扉を押した。白服のボーイだけで、ホステスのいない酒場である。しかし、かなり広い店の中は混雑していて、空席がなかった。街路に戻った彼は、ちょっと思案していたが、やがて呟いて歩き出した。

「仕方がない、あそこへ行くか」

「どこへ行くの」

「やはり、スタンド・バーだ」

「今のようなところね。あたし、綺麗な女のひとのいるバーへ行ってみたいわ」

「そんなところは詰まらないよ。勘定が高いばかりでロクなことはない」

そう言つて、彼は裏通りへ曲り込み、地下室の階段を降りはじめた。間もなく、スタンド・バー特有の背の高い椅子に、彼と道田正子は並んで腰掛けていた。カウンターのの中には、白いブラウスに赤いチョッキという揃いの服装の女が三人、立働いている。

「このバーにも、女のひとがいるじゃないの」

と、正子と言う。

「この人たちは、白いボーイ服の替りに、こういう制服を着ているようなものだ」

「でも、女のひとじゃないの」

「それには違いないが」

月岡はそのことについては、それ以上は喋りたくない様子で、

「なにかカクテルでも飲んだらどうだろう。すこしは飲める、と言っていたね」

と、カクテルとハイボールを注文した。赤いチョッキを着た若い女は、シェーカーをいくぶん不器用な手つきで振りはじめた。月岡が椅子の上に坐り直して正子に話しかけようとしたとき、勢

よく入ってきた男があった。

三角形にとがった紙の帽子を頭に載せ、上機嫌な大声で、

「おい、せき子というのはどの娘だ」

「あたしですけど」

月岡の前で、シェーカーを振っている女が答えた。

「おまえか」

その男はポケットから、ピストルを取出すと艶消しの黒い銃身を、せき子という女の腹へ向けた。両手でシェーカーを顔の前に支えているので、無防備の腹である。ためらわず、男は引金を落した。

パン。

空気の洩るような、威勢の悪い破裂音がひびいて、銃口から飛出したコルクの弾丸が、彼女の腹に当たってはね返った。コルクには細い紐がついており、銃口の中と繋がっていて、だらりと宙に吊り下った。

「あら」

せき子は手を止めて、半ば笑い出しかけている曖昧な顔つきで、男を見た。

「どうだ」

男は、威張って言う。

「なにが、どうなの」

「腹に穴があいたぞ。おなかの丁度まん中に、すこし窪みができた筈だ。嘘だとおもったら、ブラウスを開いて覗いてごらん」

「当り前よ、蛙じゃないもの」

と、せき子は声を上げて笑い出した。その声が、無邪気にひびく。まだ、二十前の若さとおもえた。

「だけど、お客さん、あたしの名前をどうして知っているの」

「しかし、須磨子の言ったとおり、可愛気のある娘だな。とても、あのしたたかものの妹とは思えないよ」

「あら、姉に聞いて、ここへおいでになったの」「可愛い娘だから、ヒイキにやってくれ、と言っていたよ。もっとも、まだ何も知らないか

ら、ヒイキにすぎてはいけない、と念を押されている。しかし、まだ何も知らないなんて、オイ、ほんとか」

男は紐の先のコルクを手繰り寄せ、銃口に詰め直すと、せき子の腹にゆっくりと狙いをつけた。二人の会話の流れから、月岡はそのとき、銃口の狙いの先にあるせき子の腹の中の子宮を想像した。……子宮というのはどんな形だったか、羽毛を捲り取られた鳥のような形だったか……、と彼はおもい、そのときふと、タバコ屋の店先で正子の髓の上に飛んだ心臓型のやすりを思い浮べた。パン！とふたたびコルクが飛んで、せき子の腹ではね返った。

「どうだ」

「……………」

「どうだ、ずしんと響いたろう」

「響いたわ」

「どこへ、ひびいた」

「心臓へひびいたわ」

「心臓……？　そうかな、どうもあやしい。須磨

子の妹が、何も知らないなんて、まったく考えられない。そうそう、須磨子がこの店はとても勘定が安い、と言っていたが本当かね」

「本当よ、だって、スタンド・バーと同じですもの」

「安い店を紹介するとは、あの女も感心なところもあるわけか。もっとも、さんざん捲り取られたあとだがね。クリスマス前となると、とくにヒドイ。こんな帽子なんぞ冠らされちまって……」

彼は頭から紙の帽子を掴み取って、傍の椅子に置き、そのとき、月岡と視線が合った。

「おや、あなたは月岡修一郎さんでしょう」

「そうです」

「いや、もちろん初対面ですが、わたしは青木というものです。ご活躍で結構ですな」

やはり、名前を言われて悪い気持ではなかった。正子は、月岡修一郎という名前自体を、知らぬ様子だ。もの問いたげに、傍で身じろぎしている。そういう正子をみて、一層その気持が強くなった。しかし、月岡は控え目に答える。

「いやあ、ぼくの名前を知っている人は珍しいのに……。小説を読むのがお好きなんですか」

「というほどでもないんですがね、あなたのは印象に残るところがありましてね。作者のあなたなら、こういえば分るとおもうが……。つまり、わたしは時計屋なんです」

「時計屋？」

月岡は、戸惑った顔になり、相手の顔を眺めた。青木という男は、黒縁眼鏡をかけ、そのうしろに服れぼったい眼がある。その眼を見ていると、一層考えが纏まらなくなる。

「月岡さんの受賞作の最初の部分に、時計屋の店が出てくるじゃありませんか」

と、青木が念を押すように言う。

「それはそうだが、あれは唯ちよっと、出てくるだけのものです」

「そう言えば、これはわたしの独り合点でしたな。唯ちよっと出てくるだけのところが、わたしにとってはずこぶる興味深かったわけです。興味深いだけでなく、商売につながるものが……。い

や、ここで説明するよりも、一度おついでのと
き、わたしの店にお立寄りください」

月岡は、黙って青木を見た。相手の魂胆が計り兼ねたからだだが、青木はすぐに言葉を補足した。

「いや、べつに勿体振ってるわけじゃない。わたしの店にちよっと立寄ってくださいれば、何にも説明しないでも、たちまち分るようになってい
る、という意味ですよ」

「なるほど」

月岡は合点したが、相手の説明に納得しただけの顔つきである。皆目見当の付かないのは道田正子で、不満そうに唇を尖がらして口を挟んだ。

「月岡さんて、小説家のね。だけど、時計屋がどうのこうのって、あたしには少しも分らないわ」

「ぼくも、この青木さんの考えは、よく分らないだのが、小説に出てくる時計屋というのは、こういう具合なんだ」

と、彼は正子に説明して聞かせた。彼の受賞作品の冒頭の場面で、主人公の若いサラリーマン

が、女との待合せの場所に行こうとしている。日曜日の昼の繁華街はひどい混雑で、ゆっくりした速度でしか歩くことができない。約束の時刻が気にかかりはじめた彼の右側に、時計屋の店舗があらわれた。店の中を覗きこむ。明るい日射しに慣らされた眼には、ひどく薄暗くみえる店のなかに、たくさん時計がぎっしり並んでいる。

四角い時計、まるい時計、菱形の時計、天井まで届く背の高い時計、大きい時計、小さい時計……。それらの時計の長針と短針は、それぞれ違った角度に離れていて、おもいおもいの時刻を示している。

あるものは、長針と短針が鋭い角度にハネ上っており、あるものは、だらりと左右に垂れ下っている。街路をゆっくり動いてゆく人の波に押されて、立止まることはできない。首をまわして覗き込みながら、あわただしく正しい時刻を探し出そうとする。その瞬間、彼の心臓の鼓動があわただしくなるのを感じた……。

「つまり、デートに出かける途中の男の心臓と、

時計屋のたくさん時計との関係を書いたわけだが……」

そう説明しながら、クイズの答を考え出そうとする顔つきになった月岡の顔の前で、青木は大きく掌を左右に動かした。黒板の文字を消しているような手つきで、

「もう考えるのは、おやめなさい。いま分るよりも、わたしの店を覗いた瞬間にパッと分るほうが、趣向がありますよ。これから一パイ飲みに出かけようというような宵の口に、ちよっとお立寄りください。わたしの縄張りをご案内させていただきます。町の時計屋に知合いがあるというのも、小説家として悪いことではないでしょう」

愛想を言う調子ではないし、腹に一もつという感じもなかった。眼鏡のうしろの眼は相変らず服ればったくて感情を示していないが、陰険にはみえず、むしろ淡々としていた。

「港区に、時計屋の店を開いています。盛り場には、便利な足場ですよ。わたしはその時計屋の若旦那、というわけなのですが、もっとも親爺